

「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」地域活性化・まちづくりへの応援

メッセージ

会報

NO. 13

2014.2.10発行

編集責任：河地 清

Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

第12回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

テーマ『ふるさと春日井の特色ある文化の再発見』

～書道文化の振興と地域の活性化～

2月2日（日）市民活動支援センター「ささえ愛センター」において第12回「ふるさと春日井学」研究フォーラムをテーマ『ふるさと春日井の特色ある文化の再発見』と設定してフォーラムを行った。発表は、市内の書家で春日井美術協会理事、市民展審査会員、道風展審査会員等の役職にある、安達 柏亭 氏が『書道文化の振興と地域の活性化』と題して発表があった。二つめは、本会会長河地 清 氏による『まちづくりの新しい発想』と題して発表があった。書道関係者も含めて参加者は35名であった。

発表後活潑な質疑も行われ、「書のまち春日井」を見直す良い機会となった「FORUM」であった。



発表者：安達 柏亭 氏

発表者：河地 清 氏



小野道風 文献資料

—発表要旨—

講師は書家で「(私設)春日井書道文化研究所」を開設した安達柏亭氏。藤田東谷(1909.1—2009.2)氏の遺志を継ぎ、春日井市の「書道文化の振興と地域の活性化」に挑む決意を固めての活動を始められた。1950年生まれ、教職を退職して5年経つ。

配布資料は「第1章小野道風顕彰活動の歴史と今後の取り組み」(11頁)「第2章道風研究の現状」(3頁)であるが、今回は第1章について話された。道風顕彰活動はすでに松河戸誌研究会の長谷川正己氏と岡嶋博氏によって詳細に発表(2013.10、第8回)されているので、今回の発表は持ち込まれ、並べられた冊子資料と「藤田東谷なくして『書のまち春日井』はありえない」といわれている「師匠藤田東谷」を語られたことが貴重であった。すでに、東谷生誕百年を記念しての「企画展『藤田東谷遺墨展』(2008.1・2)で“本当の師匠”である藤田金治氏とともに展示解説もされている。

東谷は道風顕彰活動を70年走り続けてきた人。亡くなられてから、奥様から「表札」を頂いた。これが「春日井書道文化研究所」の前に「(私設)」と付け開所したきっかけだと打ち明けられた。「恐れ多くて、同列に書道文化の振興」役というわけにはいかないとの意識が働いている。先生への恩返しで、皆様に資料を提供すること、これが「私の使命」と並々ならぬ思いをもって、遺志を受け継ぐ活動を続けている。遺品を受け継ぎ、ダンボール箱に資料を仕分けているとのこと。

東谷は自ら同人会を作らなかった。「1050年祭」(1944.11.12)を記念して作った「秋萩会」は師弟関係にあるメンバーではなかった。これがとんでもない力になったと、全国の書道界の縮図のようなものが、この春日井でできたことの意義の大きさを強調された。さまざまな考えをもつ書家の集まりでは、東西の重鎮(伊藤東海や林楽園など)を招聘し実技指導を受け、道風遺跡めぐりや文房四宝の産地への研修旅行など教養を高める行事などを積極的に組み、書道研究団体としての役割を果たした。一流一派にこだわらない、幅広い書表現活動を認める方針の中で、結果としてメンバーの中から、この地での各会派で中心となって活躍する書家を育てられた。この熱意が、「全国公募の道風展」を開催させ、「小野道風生誕1050年祭」での展覧会を継続することにつながり、小野道風生誕地を全国に宣伝する大きな力になった。この時期は毎日書道展の創設、日展の書部門の創設など全国的な書道熱の高まりとも一致する。「道風展」の「新しい時代の書とはなにか」をテーマに取り組んでいくという主張は、毎日書道展や日展での主張とも共通するものであった。道風の和様を推し進めることを超えた取り組みであったことを強調された。小野小学校を会場として実施される「県下児童生徒席上揮毫大会」は戦時中も一度も途絶えず2013年度で78回を数える。その上位入賞作品は保存され、他に類をみない書道教育史上特別貴重な資料となっている。

道風記念館に所蔵する作品は1050年祭での献書190点余が、今日では1122点に膨れ、春日井の財産となっている。同時に全国レベルでの近代書道史上の書流を網羅する貴重なコレクションとなっている。他を割愛して、以上の部分だけを紹介させていただ

いた。

二人目の講演は、本フォーラムの河地会長による「新しい『まちづくり』の発想」と題して、この1年の取り組みを総括するための視点を再度まとめられた。「ふるさと学の定義」「まちづくりの定義」の確認をし、『『地域づくり』は歴史と文化から』として、地域にある歴史資産を現代の資産にする。これからは①地域の特色（魅力性）②地域の誇り（個性・主体性）③イメージづくりという地域風土の再発見と現状認識によるふるさと意識＝わがまち意識の形成による「地域活性化」が求められると、これからの方向性を示した。

（文責：塚田 忠雄）

OPINION

特色を生かした「まちづくり」の発想！



中日新聞 2014年（平成26年）2月4日（火）報道

安達柏亭氏の発表を聴いて、この地域が書道文化という文化性を有し、小野道風という歴史性と精神性をもった地域であることが改めて認識できた。10月13日（日）第8回「小野道風－歴史の記憶と伝承－」で「松河戸誌研究会」の長谷川正己氏が地域の地域力とアイデンティティーを強調されたことと合わせて考えてみると、「書道文化」こそが春日井の文化性の特色であることがよく理解できる。「書のまち春日井」のスローガンは、もはや立派な「ふるさと意識」であり、市民のアイデンティティーといっても過言ではない。

地域再生・活性化の条件は、歴史性、文化性、精神性が基礎である。「書のまち春日井」のコンセプトは ONLY ONE の条件を満たしている。後はどのようなアプローチで振興を具現化して行くかである。いくつかのイメージが閃く。市庁舎を中心とする鳥居松地区を行政、文化、経済の活気ある地域にできないかということである。「書」文化を中心にしてである。特色ある文化「書」を基軸にした人の集まりと流れを創ればよい。この地域にそ

の環境条件はそろっている。「文化は観光を創造し、観光は文化を育てる」の言葉のとおり、その仕組みを考えることだ。広小路商店街＝典型的シャッター商店街を文字通りの「書のまち」に再生することだ。「そこにいけばすべてある」書を基軸とした小宇宙の創造である。市域のみならず全国の書道関係者が一度ならず二度三度とリピートする町並みを創ることだ。財団法人社会経済生産性本部刊「レジャー白書」（2008年）によれば書道人口800万人とも700万人ともいわれる。その人々のニーズを満たす環境づくりをすることだ。（価値受容へのナビゲート）JR春日井駅を降りると構内に市内の書家、児童の作品が鑑賞できる。正面ロータリーで「書のまち春日井」のシンボル「小野道風」の立像が迎える。書文化の臭いがするまちのイメージである。中央通りか弥生線沿いに広小路通りへの誘導路を整備する。街路沿線沿いに書のモニュメントが等間隔に設置され、書の世界へと誘う。街路灯の支柱には地域の児童の書がステッカーとして添付されて心を和ませる。メイン通りには、趣の異なる各種ギャラリーがあり、文房七宝の専門店が、書道愛好者の全てのニーズを満たす。書関連の職人の集積、表具、額等の書関連業者が集中している。そして、何よりも、書による人づくりの場も提供する。まちなみ全体が書の学びの場となっているということだ。専門知識から、趣味的知識まで全てが学べる。一流一派にこだわらず色々な書が学べる。書を通したコミュニティーの場があることだ。書のイベント、（道風展、市民展等）講習会、講演、お祭りも恒常的に開催している。グルメ、喫茶、生活用品、食料品店もある。新しい商店街の創造である。広小路通りから南への延長線には道風の里、上条、松河戸への歴史散策の観光ルートもある。鳥居松本町商店街は歴史ある下街道としての特色を書文化とどのようにコラボするか郷土館を軸に考える時が来た。広小路通りとの交差点付近に道風を祀る祠があるとよい。学問の神様、柳に飛びつく蛙の故事に因んで、祈願できる場をつくる。市民の文化的、精神的拠り所である。以上のようなイメージの実現は、空くまでも地域の生活者・行政・商工業者とのコンセンサスが大前提である事は言うまでもない。参考文献：田中夏子「イタリア職人を訪ねる旅―地域産業の社会的・文化的土壌を探る―」長野大学産業社会学部編『グローバル時代の地域と文化』郷土出版社（1999年）（文責：河地 清）

次回 FORUM のお知らせ

第13回テーマ『書のまち春日井を築いた人々』

日時：平成26年3月30日（日）13:30～15:30

場所：市民活動支援センター『ささえ愛センター』八幡小西 2階第一集会室（TEL0568-56-5451）

フォーラム内容：

①「書のまち春日井を築いた人々」

発表者：中村 立強 氏（春日井市美術協会会長）

②会員総会 平成25年度事業報告、平成26年度事業計画、会計報告その他

かすがい市民活動情報サイト：<http://kasugai.genki365.net/>

ふるさと春日井学 検索